

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

# NASHIM



2026  
Vol. 52

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

## Contents

- ウクライナからの医師へのヒバクシャ医療研修
- カザフスタンへの専門家派遣
- 韓国医師等受入研修
- ★韓国への専門家派遣
- ★長崎大学医学部原爆復興80周年事業～NASHIM活動紹介～
- 第27回ながさき国際協力・交流フェスティバル
- 出前講座の実施
- ★原爆関連図書が増刷と国内大使館への寄贈
- 永井隆平和記念・長崎賞の候補者募集

(★印は被爆80周年事業として実施)



平和祈念式典への参列 (ウクライナからの受入研修)

## ウクライナからの医師へのヒバクシャ医療研修

NASHIMでは、平成5年（1993年）からロシア、ウクライナ、ベラルーシなどチョルノービリ原発事故周辺諸国や旧ソ連の核実験場があったカザフスタンで放射線被曝者の治療にあたる医療従事者に対する指導、技術援助や医療情報提供を行うため、関係機関の協力を得て、独自に医師等の研修生を受け入れています。

今回はウクライナから4名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修生は令和7年（2025年）7月8日から8月10日まで長崎に滞在し、長崎大学や長崎大学病院を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者と交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、被爆体験講話の聴講など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センターなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。



長崎県知事への表敬訪問



修了式

### 【研修生名簿】

1. オスタフィチューク・マリヤン（ウクライナ） ウクライナ国立医学アカデミー 内分泌代謝研究所  
希少疾病・内分泌外科部門 上級研究員
2. ジハーロ・ビクトル（ウクライナ） ウクライナ国立医学アカデミー 放射線医学・血液学・腫瘍学  
学研究センター  
放射線小児科・遺伝病理学部門 上級研究員
3. シレンコ・マリヤ（ウクライナ） ウクライナ国立医学アカデミー 放射線医学・血液学・腫瘍学  
学研究センター  
肺臓学・放射線影響治療部門 研究員
4. ベリャコーヴァ・ユーリヤ（ウクライナ） ウクライナ国立医学アカデミー 内分泌代謝研究所  
一般内分泌病理部門 内分泌研究員

## 【日程概要】

7/8	長崎へ到着
7/10～7/25	関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
7/28～8/8	長崎大学・長崎大学病院等での専門研修
8/9	平和祈念式典参列
8/10	帰国のため長崎出発



長崎原爆資料館



放射線影響研究所

## 研修後の感想



### Ostafiichuk Marian (オスタフィチューク・マリヤン)

ウクライナ国立医学アカデミー 内分泌代謝研究所  
希少疾病・内分泌外科部門 上級研究員

#### I. 歴史・人道的な研修

- ・長崎原爆投下80周年記念行事への参加。
- ・原爆資料館の訪問、原爆目撃を「被爆者」から聞く。
- ・日本の体験とウクライナの悲劇（チェルノブイリ原発事故の処理作業員の功績）との類似点を探る。
- ・ノーベル賞受賞者による講演を含む追悼式典への参加。

#### II. 放射線医学と研究

- ・日本の著名な科学者による講義：中島正洋教授、鈴木啓司教授、林田直美教授、高村昇教授他。
- ・テーマ：電離放射線の身体への影響、遺伝的・細胞的メカニズム、チェルノブイリおよび福島原発事故後の小児における甲状腺病変。
- ・内部被ばく測定と長期的影響の分析に関する実習。
- ・放射線影響研究所の活動紹介。

### Ⅲ. 外科および臨床実技

- ・長崎最大の病院における臨床業務への参加。
- ・複雑な腫瘍の外科手術の補助。
- ・手術室における日本のチームワークの観察。
- ・内分泌外科（甲状腺）分野における外科的介入の範囲に関する議論、ウクライナと日本の経験の交換。
- ・最新技術の可能性に関する研究：PET-CT、セラノスティクス、最新血液学。
- ・大坪教授（内分泌外科）には、ご指導、独自の技術の実演、そして臨床症例に関する詳細な専門的議論をいただき、心より感謝申し上げます。

### Ⅳ. 公式訪問と国際協力

- ・長崎大学 永安学長の訪問。
- ・NASHIM会長、長崎県知事、長崎市長の訪問。
- ・ウクライナへの応援の言葉、日本メディアでの報道（長崎新聞、2025年8月）。
- ・NASHIM協力会からの象徴的な贈呈品として、連帯と支援の印としてウクライナへの「平和の鐘」。

### Ⅴ. ウクライナの貢献

- ・ cholnol-nobiri 原発事故の影響に関するウクライナの科学者によるデータの発表。
- ・ トロンコ博士 (M.D. Tronko) とボグダノワ教授 (T.I. Bogdanova) の教科書および出版物の日本における活用。
- ・ 外科的介入および治療結果に関する臨床データの交換。

### 結論

- ・ 33日間の研修は、以下の成果が得られました。
  - 核医学、外科、血液学の分野における知識を深める。
  - 日本の著名な教授陣と新たな学術的交流を築く。
  - 放射線被爆者と被爆二世の治療における日本医療の経験について学ぶ。
  - 外科的介入分野における実践的な経験を交換する。
  - ウクライナの科学的成果を国際的に紹介する。

### 謝辞と感想

- ・ NASHIM会長、長崎県知事、長崎市長の皆様には、ご支援、国際協力の推進、そして温かい歓迎を賜り、心より感謝申し上げます。
- ・ 高橋純平様と古田様には、研修の実施、そして真摯なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。
- ・ 大坪教授には、内分泌外科分野における貴重な経験の共有、高い専門性、そしてインスピレーションを与えてくださり、心より感謝申し上げます。
- ・ 日本の医療関係者の皆様には、温かいおもてなし、オープンな姿勢、専門性、そして友好的な態度を賜り、心より感謝申し上げます。
- ・ 日本人々の高い文化、伝統への敬意、美しい国土、そして誠実なコミュニケーションに深い感銘を受けました。



## Zyhlo Viktor (ジハーロ・ビクトル)

ウクライナ国立医学アカデミー 放射線医学・血液学・腫瘍学研究センター  
放射線小児科・遺伝病理学部門 上級研究員

2025年7月8日から8月10日までの間、私は長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）の招待を受け、素晴らしい長崎市にて放射線の健康への影響に関する専門研修に参加しました。研修の内容は非常に濃厚な組み合わせで、講義と実技、日本の医療制度の紹介、歴史と文化への触れ合い、そして国際的な公式典への参加。非常に充実した研修でした。公式訪問には、長崎県知事、長崎市長、長崎大学学長、長崎大学病院長、長崎大学医学部長への訪問、その他長崎県の医療施設への訪問が含まれていました。

研修の初日は、原爆資料館を訪れ、悲劇の全時系列に触れさせる印象的なツアーをし、その後、長崎市にお住まいの被爆者に会い、証言を聞くなどしました。被爆者とは原爆の被爆者です。彼は8歳でこの恐ろしい悲劇を体験しました。彼の話を知っていると、80年前の世界にタイムスリップしたかのような、痛みと悲しみが伝わってきました。研修期間中は、私たちは放射線影響研究所、長崎原子爆弾被爆者対策協議会、長崎市健康管理センター、日本赤十字社長崎原爆病院など、長崎で原爆被爆者への医療提供や放射線の人体健康への影響に関する科学的研究を行っている団体を訪問しました。

研修の前半では、各分野の専門家である長崎大学の教授など、日本の第一線の科学者による講義を聞く貴重な機会がありました。講義では、電離放射線の身体への影響、遺伝的・細胞的メカニズム、チョルノービリと福島原発事故後の子供たちの甲状腺病理、さらに日本の経験とウクライナの悲劇との類似点などが取り上げられました（チョルノービリ原発事故、事故処理作業員）。日本の科学者、医師、専門家たちが、原爆投下の影響を研究し、被爆者の健康に対する放射線の影響、放射線防護、そして被爆者たちと社会とのコミュニケーションについて研究し、膨大な研究を行ってきました。研究結果、経験と知識を共有していただいた講師、高村昇教授、中島正洋教授、鈴木啓司教授、林田直美教授、工藤崇教授、光武範史教授、ウラジミール・サエンコ教授、横山須美教授、森亮一教授、宮崎泰司教授、山下俊一教授、李桃生教授、柴田義貞教授に感謝の意を表します。

研修の後半は、長崎大学病院の小児科にて診察及び治療の現場を観察しました。私は日本の小児疾患の診断と治療の方法を知る機会があり、特に日本の医師に感銘を受けました。日本の医師とは多才な人物で、どの医師も最高レベルの診断方法をすべて備えており、あらゆる処置（胃十二指腸鏡検査から腰椎穿刺を伴う大腸内視鏡検査、冠動脈バイパス移植手術まで）を行っていることに感銘を受けました。小児病棟には40人の患者がおり、そこにはあらゆる異なる病気や病状を持つ子供たちがいたことも印象的でした。小児科には最新の設備が整い、4つの医師チームが勤務しています。レッド チーム（血液専門医、腫瘍専門医）、ブルー チーム（内分泌専門医、腎臓専門医、神経専門医、呼吸器専門医）、イエロー チーム（心臓専門医、アレルギー専門医 / リウマチ専門医、胃腸専門医）、そして4番目のピンク チーム（新生児専門医）は別の階にあります。毎週月曜日と金曜日に、4つのチームの医師が集まり、それぞれの患者につ

いて話し合います。時間を割いていただいた医師の皆様、また、実習中に知識と経験を共有してくださった医師の皆様に感謝申し上げます。特に研修担当の三好先生に感謝申し上げます。

本研修に参加する機会を与えてくださった長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）に感謝の意を表します。また、研修期間中ずっと一緒にいてくれて、私たちをサポートし、日本文化を紹介し、あらゆる問題を解決するのを手伝ってくれた3人の方々にも深く感謝の意を表します。高橋純平様、書類の準備やレジャー活動の面でのご支援、島原半島と雲仙火山への素晴らしい旅行、そしてリアル・ソシエダ対V・ファーレン長崎のサッカーの試合観戦で過ごした素晴らしい時間など、本当にありがとうございました。研修中に私たちのコミュニケーションを助けてくれただけでなく、東シナ海にある高島を私たちに紹介してくれた素晴らしい通訳のイリナ・タカヤに感謝します。おかげでほぼ毎週末にその海岸で休んでいました。そして、毎日朝に私たちを迎え、一日中付き添い、私たちの無事を確認してくださったNASHIMの古田様に感謝します。



## Shylenko Mariia (シレンコ・マリヤ)

ウクライナ国立医学アカデミー 放射線医学・血液学・腫瘍学研究センター  
肺臓学・放射線影響治療部門 研究員

長崎での33日間の研修中に、日本の文化、歴史、医療制度について学ぶ貴重な機会を得ました。研修プログラムの一環として、私たちは長崎市と長崎県の関係者に公式挨拶に伺い、長崎大学原爆後障害医療研究所、長崎大学病院、放射線影響研究所、赤十字病院といった主要な医療機関を訪問しました。そこで私は日本の医療の専門家たちから放射線防護、診断、治療、そして電離放射線にさらされた人々の病気の予防について学び、日本の医療制度の仕組みについても学ぶことができました。

原爆の目撃者「ヒバクシャ」との交流は特別で、深い感動を覚えました。

長崎大学では、日本への原爆投下の歴史と文化、放射線の人体への影響、放射線防護の現在の問題、医療データの統計処理方法などをテーマとした講義を受講しました。

研修の実習は長崎大学病院呼吸器内科にて行われました。私は病院の業務組織を説明してもらい、病歴の検討、治療法の議論に参加し、外来患者の診察を観察し、最新の診断手順の実施を観察する機会を得ました。この度、長崎での研修は、私にとって専門知識の源となっただけでなく、医療と国際協力の分野でのさらなる発展を促す深い文化的、個人的な経験にもなりました。

私とウクライナと同僚数名を温かく迎えていただいたことにも感銘を受けました。私たちはウクライナの代表として敬意を表し、ウクライナとウクライナ国民への心からの応援の言葉をかけられました。日本の医師たちがロシアの行動を支持しないこと、そして世界は核兵器の使用を許すことはできないことを強調したことが重要でした。なぜなら、日本は1945年の経験から、核兵器の使用がどれほど恐ろしい結果をもたらすかを知っていたからです。市長や知事への訪問は私たちにとって意義深いものとなりました。貴重な贈り物をいただき、何よりもウクライナの戦争が風化されてない、ウクライナは支援されていると感じました。

もう一つの心温まるひとときとなったのは、研修終了後の送別会でした。そこでは、研修の成果について和やかに話し合い、感想や今後の展望を共有しました。誠実でオープンな雰囲気は、忘れられない思い出となりました。

この研修の特に重要な出来事は、2025年8月9日に長崎の原爆犠牲者を追悼する平和式典に参加したことでした。それは平和と国際協力の重要性を深く思い起こさせる出来事でした。

長崎での研修は、私にとって専門知識の源となっただけでなく、文化的、個人的な深い経験にもなりました。これが私たちの交流の始まりに過ぎず、日本の医師たちとNASHIMの関係者が独立したウクライナを訪問し、同じように温かく友好的な歓迎を受ける機会が得られることを心から願っています。



## Beliakova Yuliia (ベリャコーヴァ・ユーリヤ)

ウクライナ国立医学アカデミー 内分泌代謝研究所  
一般内分泌病理部門 内分泌研究員

日本での研修は、勉強的にも個人的にも素晴らしい経験となりました。長崎大学原爆後障害医療研究所と長崎大学病院での研修を通して、内分泌学と放射線医学の知識を深め、研究と臨床実践への現代的なアプローチを観察することができました。

私は、病院の組織化の高い基準、細部への配慮、医師間の尊敬とチームワークの文化に特に感銘を受けました。

この研修のプログラムは、学問的な側面を超えて、伝統と革新の調和、優しさ、規律、そして真のおもてなしといった日本文化を体験する素晴らしい機会を提供してくれました。これはまさに一生に一度の経験であり、国際協力をさらに発展させ、関与していく意欲を私に与えてくれました。

NASHIM協力会のこの特別な機会、サポート、信頼、そしてウクライナからの研修生全員が成長し、日本の専門家の最善の成功事例や手法から学ぶことができる環境を作ってくくださったことに、深く感謝しています。



長崎原爆病院



被爆体験講話

## カザフスタンへの専門家派遣

今回のカザフスタンへの専門家派遣は、NASHIM構成機関から長崎県医師会常任理事である佐世保中央病院の米満光久病理部・診療検査部長、そして長崎大学原爆後障害医療研究所の中島正洋教授ほか3名の計5名で、令和7年9月23日から28日にかけて実施しました。その内容について、米満部長が『長崎県医師会報第960号（令和8年1月）』に寄稿されましたので、米満部長と県医師会のご了解をいただき転載しております。

### 令和7年度ナガサキ被爆者医療国際協力会（NASHIM） カザフスタンへの専門家派遣事業に参加して

長崎県医師会常任理事 米満 伸久

長崎県では、長崎県、長崎市、長崎大学、長崎県および市医師会、日赤原爆病院、放影研、原爆被爆者対策協議会、平和推進協会などで構成されるナガサキ被爆者医療国際協力会（NASHIM）が、平成4年に発足し、在外被爆者や放射線被曝事故による被災者を救済する活動を行っています。その一環として、国外からの研修生の受け入れ、国外への専門家派遣事業、講演会開催、医学書の出版などを行っています。

今回、2025年9月23日から28日、NASHIMカザフスタン派遣事業に、長崎大学原研の中島正洋教授、同助教でカザフスタン出身のムサジャンワ ジャンナ先生、長崎大学グローバル連携機構助教の高橋純平先生、長崎県原爆被爆者援護課の古田伊織さんとともに参加しました。

NASHIMでは専門家研修事業として以前よりウクライナ、ベラルーシ、ロシアからの研修生も受け入れていましたが、ウクライナ戦争以降はカザフスタンからの研修生のみ、おもに国立病院機構長崎医療センターと大学、原爆病院などで受け入れています。実績として、平成5年から令和7年で合計456名の医師等専門家が長崎で研修を修了し（韓国279名、カザフスタン50名、ベラルーシ64名、ロシア32名、ウクライナ30名、令和5年以降、ベラルーシ、ロシア、ウクライナからの受け入れはなし）、各々の母国にて活躍をしています。

9月23日福岡空港から仁川空港経由で、アルマトイに向かいました。翌24日はアルマトイからアバイ州セメイに移動し、アバイ州医師会会長で、これまでもしばしば長崎を訪問しているエンセバーエフ先生の出迎えを受け、昼食会に招待されカザフスタン流の歓迎を受けました。



セメイ到着後エンセバーエフ先生との昼食会

昼食後は、セメイ市立周産期医療センターを訪問しました。ダイルベークコフ院長も長崎訪問の経験があり、案内していただいたジュセケーノヴァ副院長、サマルカンNICU部長、NASHIM研修生のソコロヴァ先生（新生児心臓専門医）、カビーエヴァ先生（周産期専門医）とお話し、NASHIMへの感謝の言葉をいただきました。同施設はNICU12床、入院14床で、訪問時900gの新生児がNICUで治療を受けていました。この施設でこれまで最小の児は出産時480gだったようですが、現在4歳で発育遅延はなく元気とのこと。光線療法なども行っており、当日も治療を受けている児がいました。この周産期センターは、セメイ市33万人だけでなくアバイ州、セメイ市周囲100km（185,500㎡）61万人のエリアに対応しているそうです。カバー範囲が広いことと、当施設で難しい症例はアスタナの大学病院まで専用の移動用NICU bedを乗せて、ドクターヘリではなく、ドクターフライトで対応しているとのことでした。



セメイ市立周産期医療センターのスタッフと



セメイ市立周産期医療センター光線治療室

次に訪問したセメイ市立周産期医療センターでは、NASHIM 研修生のサポート院長、バスカーコヴァ看護担当副院長、バフティパーエフ外傷部長、NASHIM 研修生で外傷・整形外科のサディーコフ先生、ジャメディーノフ医療品質管理担当副院長の歓迎を受けました。院長室での懇談後、院内を案内していただきました。ベッド数は400床で、Hybrid手術室を備えており、CT scanなどの医療機器を見学しました。循環器、消化器、外傷などの病棟があり、各病室のベッド400カ所と、ナースセンター、トイレなどにも日本のODA「草の根・人間の安全保障無償資金協力」で院内 nurse call system、400床+200カ所に設置が丁度終わったところでした。10月には在カザフスタン日本国領事にも参加していただき完成記念式典が開催されるということです。病室は基本的に1部屋4ないし5床で、2床部屋、3床部屋は有料とのことでした。旧ソビエト時代からの制度で、これまで医療は無料だったそうですが、現在あたらしい保険制度の設立を検討中とのこと。院長

先生はじめ今後とも NASHIM を通じた協力関係の発展を希望されました。



セメイ市立周産期医療センター玄関



セメイ市立周産期医療センター院長室で面談



セメイ市立周産期医療センター nurse call system

当日夜は、アバイ州医師会との懇親会が開催され、エンセバーエフ先生はじめ医師会の先生方、セメイ医科大学学長、周産期医療センター院長、

救急救命病院院長先生方などと懇談し、大いに盛り上がりました。



アバイ州医師会との夕食会

翌朝は早朝セメイ空港発、首都アスタナ8:00着で、その後は一日フリーでした。アスタナは黒川紀章氏の設計による、20年前から建築がはじまり、アルマトイから遷都された人工的な都市です。人口は200万人で毎年増加し続けており、建築ラッシュも続いています。現在鉄道の駅と空港をつなぐ高架の電気鉄道が建設中です。近代的で整然とした町で、道路もほとんど片側3車線以上ですが、朝夕は結構渋滞しています。

到着日は、午前中国立博物館を訪問し、有名な黄金人間=ゴールデンマン（最近レプリカの展示）などを見学しました。広くて立派な国立博物館です。その後、近くのモスクを訪問し、ホテルにチェックインした次第です。夜は原研の高村先生のお知り合いで、大学の放射線関連の研究者、韓国系アメリカ人のLisa Limさんとカザフの伝統的な料理のレストランで会食しました。

翌日は午後から中島先生たちと合流して、国立がんセンターとナザルバーエフ大学を訪問しました。中島先生とジャンナ先生は、前日からアスタナのUniversity Medical Centerで開催された学会、International Society of Pediatric Oncologyに参加し、中島先生は当日のシンポジウムでゲノム医療に関する講演をされました。



国立がんセンター外観



国立がんセンタースタッフ

国立がんセンターは昨年建物が完成した先進的な施設で、院長先生らと面談後、放射線治療部門と臨床検査病理部門を見せていただきました。放射線治療部門のインディラ部長の案内で、CTやMRIを併設した5台の放射線治療装置と、中央アジア初のポジトロン治療装置2台を見学しました。ポジトロン治療は10月から実際に稼働予定とのこと。本施設ではカザフスタンで初めて、陽子治療、放射性核種治療、レーザー治療、分子遺伝学治療、免疫細胞治療、そして個別化医療を用いた治療が開始されたそうです。

その後、臨床検査病理部門をNASHIM研修生のサルタナ部長の案内で見学しました。病理検査に関してはほぼ日本の病理検査室と同様の機器で同じような運用システムですが、検査室の広さとスタッフの多さはうらやましい限りです。病理標本のデジタル化、Whole Slide Imageの為の scan-



ポジトロン治療装置



臨床検査病理部門スタッフと



放射線治療装置



臨床検査病理部門検鏡室

ner も導入されており、digital pathology による長崎大学との consult の話なども出ました。今後とも NASHIM を通した協力関係の強化をお願いされました。

がんセンター訪問後、当初の予定外でしたが、カザフスタンの大手衛生検査所、カザフスタン国内 20 地域を網羅するラボを有し、検査件数 130,000 件/日を誇る民間企業である OLYMP を訪問しました。この検査所は、民間企業としてがんゲノム医療に関連した検査、がん遺伝子パネル検査を行おうと計画しているとのことでしたが、中島先生が学会で使われたスライドを用い、日本のがんゲノム医療のシステム、13 のがんゲノム医療中核拠点病院・拠点病院 32 か所・244 の連携病院について説明されるとともに、この事業は国家プロジェクトとして行うことが望ましい点などを説明されました。



ナザルバーエフ大学 HP から

その後、ナザルバーエフ大学の life science 部門の Laboratory of Genomic and Personalized Medicine を訪れました。Dos Sarbasov 教授の研究室を、NASHIM 研修生 2 回、長大原研で博士を取得された Ainur Akilzhanova 教授に案内していただきました。細胞培養施設とともに、DNA, RNA 解析の為の NGS を含めた先端の実験施設でした。



ナザルバーエフ大学 建物内中央通路



中島先生のがんゲノム医療についての Lecture、  
中央の女性研究者が Ainur Akilzhanova 教授



ナザルバーエフ大学 20 周年記念行事準備中



Dos Sarbasov 教授



ナザルバーエフ大学の life science 部門の Laboratory  
of Genomic and Personalized Medicine

その日の夜はレストランで NASHIM 夕食会が開催されました。最初に森崎会長の挨拶を私が代読させていただき、高橋先生にロシア語に翻訳していただきました。参加者は、  
 アイヌル・アキルジャーノワ 2005 年 ナザルバーエフ大学 ナショナルラボ・アスタナ 生命科学域部門長  
 アセリ・ジャナトベーコワ 2006 年 保健省勤務  
 アルマ・トカーエワ 2015 年 セメイ医科大学  
 サルタナト・ボルシンベーコワ 2017 年 国立がんセンター病理部門長  
 グルバス・アキルジャーノワ 2023 年 セメイ医科大学・パプロダール分校  
 ラウラ・パク 2023 年 国立がんセンター  
 ジャナール・エレウバーエワ 2024 年 がん・

放射線医療研究センター

ウリクバク・カイロフ 2023年 ナザルバー  
エフ大学 ナショナルラボ・アスタナ  
ナゼルケ・サトヴァルディーナ 2024年 ナザ  
ルバーエフ大学 ナショナルラボ・アスタナ  
トレバイ・ラヒプベコフ プライマリーヘルス  
ケア協会長（元セメイ医科大学学長）

のほか、ジャンナ先生のお母様と赤ちゃん連れの  
妹さん、中島先生、高橋先生、古田さんと私の合  
計17名でした。皆さんNASHIMで研修されたこ  
とに非常に感謝されているとともに、各方面で  
活躍になっていらっしゃいます。ここでも、  
NASHIMの事業がいかに有意義で役に立ってい  
るかを痛感した次第です。

最終日はアスタナ発18:00のフライトまで時  
間がありましたので、前夜夕食会に参加していた  
ラウラ先生ともう一人の女医さんと昼食をとも  
にしました。ラウラ先生は近々ボストンに留学さ  
れるとのことでした。このレストランは2017年  
万博がアスタナで開催された際のカザフスタン  
館で、現在は閉鎖されている球状の建物を隣接  
していました。その後、近くのショッピングセン  
ターで時間をつぶし、帰港の途についた次第  
です。



NASHIM 夕食会



NASHIM 夕食会



2017年カザフスタン万博館

## 韓国医師等の受入研修

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わっている韓国の医師等を招いた受入研修を実施しています。

第1回は10名の看護師・放射線技師等が参加し、令和7年（2025年）10月26日から30日まで、第2回は10名の医師・看護師等が参加し、令和8年（2026年）1月18日から22日までの日程で行われ、長崎大学や日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所で、ヒバクシャ医療に関する知識の取得や情報交換を行うとともに、被爆者からの講話を聞いたり、長崎原爆資料館などを訪れ、長崎原爆の実相について学びました。

なお、第2回研修では、長崎県が実施する在外被爆者支援事業の一環として招聘したブラジル人医師2名（タドコロ・ハカル先生、ジル・フェレイラ・ブルーナ先生）も合同で受講しました。

### 第1回 韓国医師等受入研修（令和7年10月26日～30日）

#### 【日程概要】

- 10/26 長崎へ到着
- 10/27～29 関係先訪問・見学、長崎大学での講義
- 10/30 長崎より帰国

#### 【研修生名簿】

- |                    |           |       |
|--------------------|-----------|-------|
| 1. 裴 美善（ペ・ミソン）     | ソウル赤十字病院  | 看護師   |
| 2. 金 正淑（キム・ジョンスク）  | 尚州赤十字病院   | 看護師   |
| 3. 河 建永（ハ・ゴンヨン）    | 統営赤十字病院   | 看護師   |
| 4. 金 ヒェリ（キム・ヒェリ）   | 居昌赤十字病院   | 看護師   |
| 5. 徐 賢紀（ソ・ヒョンギ）    | 慶熙医療院     | 看護師   |
| 6. 李 栄蘭（イ・ヨンラン）    | 釜山報勲病院    | 看護師   |
| 7. 金 原澈（キム・ウォンチョル） | 韓国原子力医科学院 | 放射線技師 |
| 8. 李 到映（イ・ドヨン）     | 韓国原子力医科学院 | 看護師   |
| 9. 李 炳柱（イ・ビョンジュ）   | 韓国原子力医科学院 | 行政職   |
| 10. 蔡 熙ト（チェ・ヒボク）   | 韓国原子力医科学院 | 行政職   |



日赤長崎原爆病院視察



長崎大学原爆医学資料室

## 第2回 韓国医師等受入研修 (令和8年1月18日～22日)

### 【日程概要】

- 1/18 長崎へ到着  
1/19～21 関係先訪問・見学、長崎大学での講義  
1/22 長崎より帰国

### 【研修生名簿】

1. 韓 恵蓮 (ハン・ヒェリョン)	ソウル赤十字病院	看護師
2. 宋 恵善 (ソン・ヒェソン)	尚州赤十字病院	看護師
3. 金 美辰 (キム・ミジン)	統営赤十字病院	看護師
4. 趙 洙賢 (チョ・スヒョン)	居昌赤十字病院	看護師
5. 卞 自人 (ピョン・ジン)	大邱カトリック大学病院	看護師
6. 李 政柱 (イ・ジョンジュ)	釜山報勲病院	医師
7. 李 昭喜 (イ・ソヒ)	韓国原子力医学院	看護師
8. 吳 昌祐 (オ・チャンウ)	東南圏原子力医学院	放射線技師
9. 金 아침햇살 (キム・アチムハッサル)	国軍咸平病院	看護師
10. 徐 正基 (ソ・ジョンギ)	国軍咸平病院	行政職



原爆落下中心地碑



被爆体験講話

## 研修後の感想

### 【第1回】

- ・ NASHIMの研修に参加することになり、長崎を訪問できたことに感謝します。原爆について漠然としていることをより詳しく知ることができました。この機会を与えてくださり、ありがとうございました。原爆患者の診療時に、患者の状態について更に参考にできると思います。長崎について、更に知ることができた研修でした。現在、日本の放射能被害者の回復のため苦勞されている方々に敬意を表します。
- ・ 10/29の被爆体験談の講義では、ご年配の方からお話を聞かせていただきました。すべての講義を準備してくださるのは大変だったと思いますし、お疲れさまでした。
- ・ 今回の研修を通して、本当に核はなくすべきであり、戦争は二度と起きてはならないと思います。大きな事件、事故の中でも多くの発展と医療技術を発展させた日本に多くの賛辞を送ります。今回の研修で多くのことを学びました。ありがとうございます。良い思い出になりました。
- ・ 私は現在、釜山報勲病院の手術室で勤務していますが、それ以前に内視鏡室で勤務していたことがあります。その当時、原爆被爆者の患者の方が検診に来られていたのをたまに見かけました。その時は、た

だそうなのかと何気なく他の患者と同じように考えていました。しかし、今回の研修を受けながら、原爆関連の様々な体験と原爆資料館の視察、原爆の研究資料を見て、本当にどれくらい大変な時期と苦痛を味わったのかを考えると、涙が出てきます。原爆被爆による造血障害、がん発生の増加とゲノムの不安定性など、原爆の後障害に対する研究支援と原爆被爆者の支援、そしてその二世に対する支援は継続されなければと思います。

今回の研修にご尽力いただいた方々に感謝を申し上げます。



講義風景①



講義風景②

## 【第2回】

- ・長崎の残酷な惨状を写真及び生々しい証言を通じて、今も進行中である被爆者たちの苦しみを十分に共感したと共に、核兵器が単に戦争を終える道具ではなく、人間の尊厳性を丸ごと揺らす膨大な災いであることを深く感じるきっかけになりました。二度とあってはならない歴史です。そして、単純に講義室での講義だけの日程ではなく、視察、見学、実習等を通じて様々な面での研修内容は退屈でなく集中できる要素でした。交通手段、宿、日程等、優しい配慮に誠に感謝致します。
- ・原爆についてもっと学ぶことができました。原爆による癌の発生率と健康管理について学ぶことができました。たくさんの知らなかったことについて知ることができました。一番良かったのは平和公園に行き、自分の目で見たこと、そして韓国人犠牲者慰霊碑に参拝したことです。とても意味深い経験でした。
- ・原爆の被害に対する継続的な研究と支援がすごいと思います。時間が経つと忘れ去られがちですが、記憶するため、繰り返さないため、被爆者たちの苦しみに共感し、配慮する姿が良かったです。そして美しい長崎への訪問に導いた、素敵な仕事をしているNASHIM関係者たちに感謝致します。二度とこんな悲劇が起こらないといい。被爆者たちの苦しみを全て理解はできませんが、ここに来て見て、聞いて、感じながら、普段知らなかったことを知ることができましたし、たくさんのことを考えました。被害を受けるのは結局、無力な国民であり、一般の人たちであること。世界の平和を祈ります。
- ・被爆について様々な疫学的研究と調査が継続的に行われていることが分かり、関連した歴史と調査について情熱的な講義を下された全ての先生に感謝致します。
- ・長崎で原爆による被害を直接的に振り返ることができる機会でしたし、その惨状を背景にして原爆記念館及び観光地として発展させたことが素晴らしいと思います。二度とこのような悲劇が起こらぬよう願います。

## 韓国への専門家派遣

令和7年11月10日（月）韓国原子力医学院国立緊急被ばく医療センターにおいて、被爆80周年記念事業として、HICARE（放射線被曝者医療国際協力推進協議会）とNASHIM（長崎・ヒバクシャ医療国際協力会）は共同で、広島及び長崎に蓄積された被爆者医療の経験や原爆放射線の人体影響に関する研究を踏まえ、直接被曝者に接する現地医師等を対象とした研修会を実施しました。

開催の目的は、高齢化が進んでいる在韓被爆者がより日常的に、安心して適切な医療を受けられるよう、被ばく者医療の最新の知見をより一層普及させること、これまで、HICAREとNASHIMは、韓国（韓国原子力医学院（KIRAMS）や大韓赤十字社等）から、それぞれ研修生を受け入れており、現地でセミナーを実施することにより、医師等受入研修のより一層の活性化と放射線被ばく者医療に関するより一層の普及啓発を図ることです。

HICARE会長で公益財団法人放射線影響研究所の神谷研二理事長が「被爆者から学ぶ放射線の健康影響の知見」、HICARE幹事で広島大学原爆放射線医科学研究所の廣橋伸之教授が「ヒロシマ・ナガサキから80年、日本の原子力災害医療における教訓と課題」、NASHIM運営部会副部長で長崎大学原爆後障害医療研究所の高村昇教授が「チヨルノービリと福島教訓」とそれぞれ講演を行いました。

高村教授は、長崎大学が長崎原爆により得られた知見をもとに、チヨルノービリ原発事故、福島原発震災被害について、それぞれの放射線被ばくの特徴や、現地で行った活動や支援の内容についてご自身の経験を踏まえ講演されました。

講演には韓国原子力医学院の医師や看護師等の医療関係者82人が参加し、講演を熱心に聞き入っていました。講演の後には、活発な質疑応答が行われ、非常に有意義な講演会となりました。



高村教授の講演



講演会参加者との写真撮影

講演会に先立ち、大韓赤十字社に表敬訪問を行いました。

大韓赤十字社は、長崎県と委託契約を締結し、韓国国内での医療費の支給や、長崎県と協力して韓国各地での健康相談事業を実施するなど、在韓被爆者の支援を長年にわたり行っています。

大韓赤十字社では、ホ・ジョング在外同胞支援本部長との歓談の後、大韓赤十字社資料展示室において、チョン・ジェウン福祉事業チーム長に大韓赤十字社の活動内容や歴史、展示物の案内をしていただきました。



大韓赤十字社資料展示室にて



大韓赤十字社にて

また、韓国原子力医学院緊急被ばく医療センターでは、チョ・ミンセンター長をはじめとする医療スタッフの方々とのランチミーティングの後、センター長によるセンターの活動内容の説明や、施設内の案内をしていただきました。



緊急被ばく医療センター案内



緊急被ばく医療センターにて

## 第2回韓国専門家派遣

期 間：令和8年3月7日～10日

講 師：長崎大学原爆後障害医療研究所 中島 正洋 所長

「原爆後障害医療研究所による被爆者の晩発放射線に関する健康調査」

長崎大学原爆後障害医療研究所 横山 須美 教授

「眼水晶体の放射線防護」

会 場：ソウル赤十字病院（ソウル）

その他：被爆80周年事業として、NASHIM理事による韓国原爆資料館、原爆被害者福祉会館訪問（ハプチョン）、韓国原子力医学院表敬、NASHIM研修生OBとの意見交換会（ソウル）を実施

# 長崎大学医学部原爆復興80周年事業

令和8年7月14日出島メッセ長崎にて、7月15日～8月9日医学部基礎研究棟1階ロビーにて、「長崎大学医学部原爆復興80周年事業 長崎医科大学原爆被災写真・資料展」へNASHIMの活動状況やヒバクシャ医療についてのパネル展示を行いました。



出島メッセ長崎での展示



医学部基礎研究棟1階ロビーでの展示



出島メッセ長崎での展示



出島メッセ長崎での展示

# 第27回ながさき国際協力・フェスティバル

令和7年12月14日に長崎市内で開催された「ながさき国際協力・交流フェスティバル」に出展しました。NASHIMでは、活動状況やヒバクシャ医療についての情報を掲載したパネルの展示、小冊子「漫画で学ぶ長崎原爆」、「機関誌」の配布を行いました。

主催者の（公財）長崎県国際交流協会によりますと、当日は、約2,300名の参加者で賑わったとのことです。

## 《概要》

- 日 時：令和7年12月14日（日） 11:00～16:00
- 会 場：長崎県庁1階（長崎市尾上町3-1）
- 主 催：（公財）長崎県国際交流協会、フェスティバル2025盛り上げ隊
- 来場者数：約2,300名      ●出展団体：県内国際協力・交流団体 30団体



## 出前講座の実施

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及し、被爆者医療にもっと関心を持っていただくため、長崎大学原爆後障害医療研究所の先生方に小中学校を訪れて講義を行っていただく「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座となっています。

今年度は3校（横尾中学校、三重中学校、カリタス女子中学校）から申し込みがあり、全3回実施しました。

西 弘大 先生による「こわい？こわくない？放射線のふしぎ」、「測ってみよう放射線」では、放射線測定器を使った実験も行い、実際に身の回りのモノや身体などを測ることで、生徒たちは放射線が身近にあることを実感しながら、興味深く学んでいました。



横尾中学校（西先生）



横尾中学校（西先生）

三根真理子 先生による「長崎原爆の話・長崎原爆被爆者のこころの調査」では、アニメーションやクイズを交えながら講義を行い、生徒たちは元気よくクイズに答えながら、原爆のことについて学んでいました。



三重中学校（三根先生）



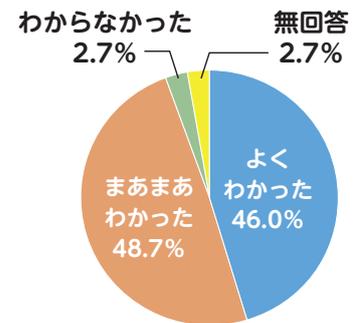
カリタス女子中学校（三根先生）

講師の先生方、参加していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。

開催日	学校名	講義名	アンケート結果					よくわかった・ まあまあわかった の割合	講師
			よくわ かった	まあまあ わかった	わからな かった	無回答	合計		
6月12日	横尾中学校	こわい？こわくない？放射線のふしぎ 【実習】測ってみよう放射線	29	6	0	1	36	97.2%	西
7月10日	三重中学校	長崎原爆の話・長崎原爆被爆者のこころの調査	75	104	6	5	190	94.2%	三根

多くの生徒の皆さんが、熱心に話に耳を傾け、出前講座終了後に実施したアンケートでは、94.7%の生徒さんたちが「よくわかった」または「まあまあわかった」と回答されました。

### 講座内容について(2校合計)



### 生徒達の感想

- 放射線は意外と身近にあることが分かった。
- 放射線と聞いて怖いイメージばかりと考えていたけど、今日の授業で放射線が正しく制御されていたら体に影響がないとわかった。それに加え、正しく使えば生活に役立つことを知った。
- 今日の講座を聞いてもっと放射線について知りたいと思いました。
- いろいろなものを放射線があるかないか調べて楽しかった。
- 被爆者の体験談で「なぜ、自分は亡くならなかったのか、一緒に死にたかった。」という話がすごく心に残りました。
- いろいろな人にこの話を聞いてほしいと思った。
- 被爆者の方のやけどの傷だけではなく、放射線で髪の毛がぬけてしまったり、放射能の影響は目に見えないうちに体に及んでしまっていると知り、すごく怖かったらうなと思いました。
- 話を聞いて秋月先生という聞いたことがない人のことを知れてよかったです。
- 原爆が落とされたところから3,000mも被害があったのを聞いてびっくりしました。

## 令和8年度 出前講座

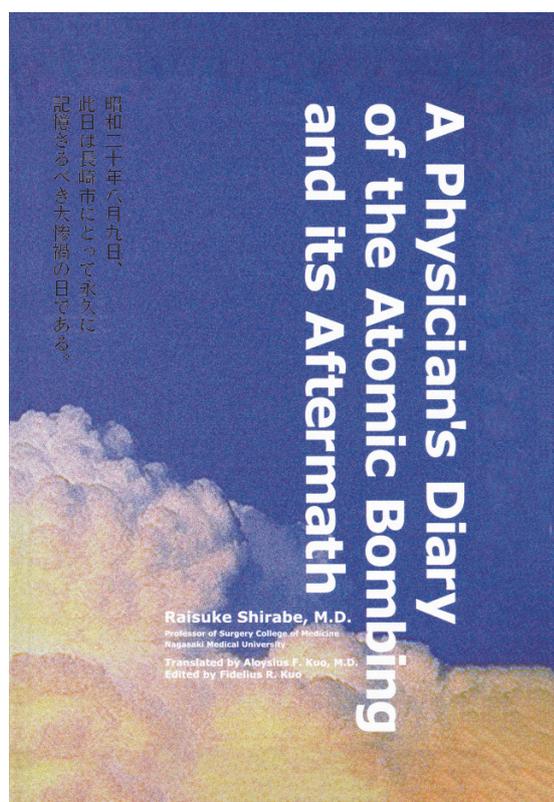
下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。講座費用は無料です。

講座メニュー		
【実習】測ってみよう放射線		90分 (短縮可)
こわい？こわくない？放射線のふしぎ		
放射線を浴びたらどうなるの？体の中のをのぞいてみよう！		
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査 長崎原爆被爆者のこころの調査	

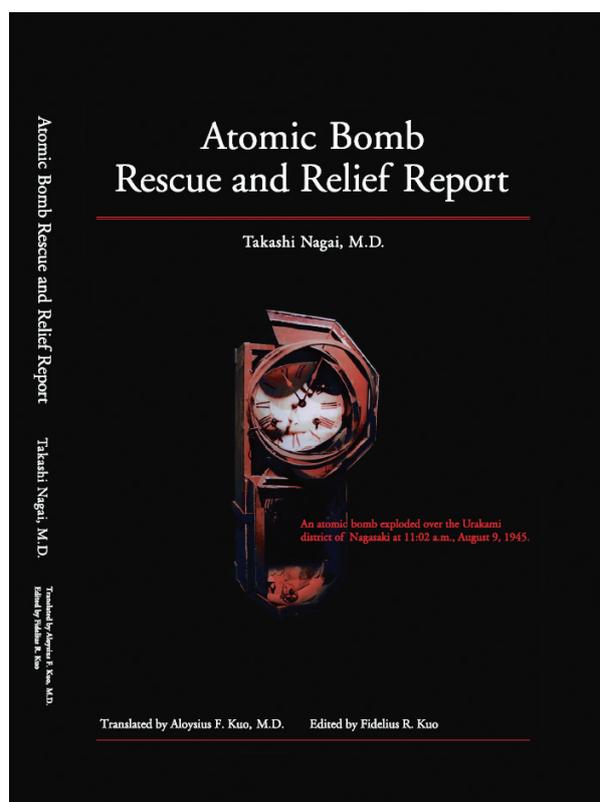
# 原爆関連図書の新刷と国内大使館への寄贈

被爆80周年事業として、調来助著「原爆被災復興日誌」、永井隆著「原子爆弾救護報告」の英訳版を増刷し、日本国内の各国大使館159か所へ郵送しました。

後日、数カ国の大使館から、図書郵送に対する感謝と平和への想いを記したお礼状が届きました。各図書については、長崎大学医学部資料展示室前の書棚に配置しており、訪れた方はご自由にお持ち帰りいただけます。



「原爆被災復興日誌」(英訳版)



「原子爆弾救護報告」(英訳版)

# 第16回永井隆平和記念・長崎賞の候補者募集

NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年（1995年）に、原子爆弾により自らも重傷を負いながらも被爆者の救護に挺身された永井博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しました。

この賞は永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を顕彰するものですが、令和8（2026）年度は第16回を実施する予定です。

5月から候補者の募集を開始する予定ですので、本賞の候補者としてふさわしい方を是非ご推薦ください。詳細についてはホームページでお知らせします。



表彰回数	受賞者氏名	職名（授賞時の職名）
第1回	秋月 辰一郎	聖フランシスコ病院顧問 医師
第2回	サイム・バルムハノフ	放射線腫瘍医学研究所所長（カザフスタン共和国）
第3回	ヨハネス・ヤコブ・ブローゼ	ライデン大学教授（オランダ）
第4回	エヴゲニイ・デミチュク	保健省放射線内分泌研究所甲状腺部門部長（ベラルーシ共和国）
	鎌田 七男	(財) 広島原爆被爆者援護事業団理事長
第5回	日本チェルノブイリ連帯基金	長野県松本市（理事長 鎌田實）
第6回	市丸 道人	長崎大学名誉教授
	横路 謙次郎	広島大学名誉教授
第7回	アナトリイ・ツイーブ	ロシア医学アカデミー・オブニンスク医学放射線研究所長
第8回	クリストフ・ライナー	ドイツ・ビュルツブルグ大学病院院長
第9回	ミコラ・トロンコ	ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長
第10回	丹羽 太貴	福島県立医科大学特命教授
第11回	ドミトリー・バジーカ	ウクライナ国立放射線医学研究センター所長
第12回	タチアナ・ボグダノワ	ウクライナ国立内分泌代謝研究所内分泌病理研究部門長
第13回	佐々木 康人	湘南鎌倉総合病院附属臨床研究センター・放射線治療研究センター長 放射線影響協会理事長
第14回	前川 和彦	東京大学名誉教授 (医) 明和会 上溝介護老人保健施設 いずみ 施設長
第15回	チェン・ケッツ・リッティ	カンボジア王国 上級大臣（首相補佐特命相）